

耶麻郡熱塩加納村の半在家にみられるのが貴重な証跡である。

永仁元年（一二九三）佐原三代光盛の世に、佐原氏が相模の国芦名に住むので、葦名氏と改めた。七代直盛、康暦元年（一三七九）会津に下向して幕の内に住むとある。三年住んで永徳元年（一三八一）融通寺町小館に移る。さらに至徳元年（一三八四）小田に移り、黒川と改むとあるが、これが現在の若松城の前身であり、会津若松市形成になる。

小田山・小田垣という地名が残っていて、現在の若松城よりは小田山寄りにあり、小田垣の垣は関西方面で垣内と書いてかいとと呼び、堀で囲まれた村の区画を指すから、そのような意味と内容をもっていたのかとも思われる。葦名氏は二〇代の長きにわたって会津の治政に当たったが、天正十七年（一五八九）六月五日義広、磐梯山麓摺上原の戦に仙台の伊達政宗に敗れて滅びた。翌十八年豊臣秀吉が会津に來訪したことになる。

その年秀吉は改めて会津に蒲生氏郷を封じたのである。英邁なので栄転の左遷のような形であったかも知れない。若松の城下町形成は、実にここから起るといっても過言ではない。戦国の乱世がおさまり、各藩が鋭意、自分の藩の内政に勤めた頃で、城下町の形成、会津産業の開発など、殆どを蒲生氏郷の功にゆだねているが、これは日本国中の城下町形成でもいえることで、藩として振興政策を起した時代にも相当する。

秀吉は文禄二年（一五九三）検地を初めて行なっているが、会津領は最初は七三万五千石とはかられたが、再検地で九二万石になっている。氏郷は江洲、今の滋賀県の日野の出であるが、天正十六年に伊勢松坂の城主になり、二カ年にして会津藩に移ったことになる。

まず今まで黒川と呼んでいたのを若松と改め、黒川城を鶴が城と呼び、廓の内外を整備して、七層の天守閣を築いたとある。この天守閣は後に五層に改められ、古い構築の様子はよくわからない。天守の石垣その他に残る